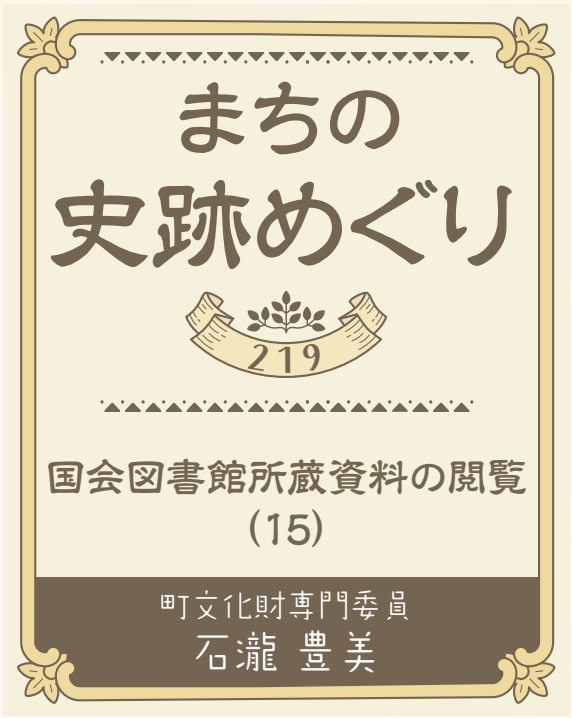




今回は須恵町ゆかりの人物について取り上げたいと思います。ただ、評価が定まらないことがあるため、人物については、公的に取り上げにくいところがあります。一方から見ると、素晴らしい業績があると評価される場合があっても、立場を異にすると、全く反対の評価ということがあるかもしれません。また、人の人生はそもそも紆余曲折があるもので、断定的な評価がしにくいということもあります。

ここで取り上げる人物についても、評価ではなく、そういう生き方をした人がいた、という程度の紹介にならざるを得ない

いうことは、あらかじめお断りします。国立国会図書館デジタルコレクションを検索することで、これまで知らなかった人物を見出すということがあるのが面白いところです。今は忘れられた人がその時代の有名人ということも起こります。戦前の須恵村で新聞が発行されていたことは初めて知りました。

■新聞人武井志徽と福岡糟屋新聞

『日本新聞年鑑第4巻(1925年大正14年版、日本図書センター、1985年)の「名鑑」に須恵村出身のジャーナリスト 武井

には、

(題号)福岡糟屋新聞 (発行日)月一回 (創刊月日)昭和三、一〇、二三 (発行所)粕屋郡須恵村[大字名……欠]四二二 (発行人)武井志徽 (編輯人)同上

九州大学新聞 月一回 昭和二、六、七 同郡箱崎町法文学部 赤松頭二 同上 篠栗新報 年四回 昭和二、二、二二 同郡篠栗村 藤卯一郎 西島隆一

【摘要】(空欄)『全国新聞雑誌通信社名鑑』(全国新聞雑誌通信社聯盟編・発行、1935年(昭和10年)では、(題号)福岡糟屋新聞 (発行日及発行回数)月二回 (発行所)福岡市古塚三角七二三 福岡糟屋新聞社 (発行人)又ハ社長 武井志徽 (第三種郵便物認可年月日)昭和四年六月四日

以上の記事から、福岡糟屋新聞は1928年(昭和3年)、須恵村で創刊され、馬出(古塚)を経て、1939年昭和14年(までに香椎村へと移転していることになります。

『福岡県新聞紙名簿』(1933年)から糟屋郡内で発行されていた新聞・雑誌(定期刊行物を挙げておきます。順に(題号)(発行日(創刊月日)(発行所)(発行人(編輯人)【月三回以下】

新原 月一回(雑誌) 大正一五、二、四 粕屋郡志免村赤坂 吉田儀市 同上 研究と報告 年四回(雑誌) 昭和五、一〇、二五 同郡箱崎町法文学部 林田和博 同上 ※九州大学のごとく

志徽の名が出てきます。名前が「しげき」という読みであることは間違いないでしょうが、「徽」という名前がいかにジャーナリストという感じがするので、改名したのかもしれない。号(ペンネーム)は「東天」です。当時の記者は、記事に署名する際に号を用いることがよくありました。主筆は新聞社の中心人物で社説を書くような立場です。粕屋は粕室と誤植がありましたので改めました。(また、以下では粕屋・糟屋が混用されていますが、いずれも原文の通りです)1901年明治34年生まれ、中央大学出身で、1925年(大正14年)にはまだ満24歳の若者です。福岡市中島町は現在の博多区中洲を言います。

武井志徽(東天) 博多日日新聞主筆。福岡県粕屋郡須恵村(明三四、七)生。中央大学。(新聞歴)博多毎日、久留米毎日を経て現社へ。(現住)福岡市中島町浜新地(電話三二〇六)

同書の『全国新聞社一覧表』には福岡県で21紙を挙げていますが、その中に久留米毎日(1918年(大正7年)創立)の名はあるものの、博多日日、博多毎日はありませんでした。当時の福岡県の代表的な新聞は福岡日日新聞、九州日報、門司新報で、それと並んで九州時事新報があり、そこにも武井志徽の名があ

沖口安一 同上

「福岡糟屋新聞」九州時事評論ともに原紙はどこにも保存されていないと思われる。古い新聞紙は引き出しの中の湿気よけの下敷きにされているなど再利用され、たまたま残ることになります。新聞社がファイルして意図的に残している場合を除けば、大掃除の際などに家庭で偶然に見られるのがほとんどで、たとえ断片的なものでも貴重です。須恵村で発行されていた「福岡糟屋新聞」九州時事評論もどこかに眠っていてほしいものです。

■雑誌「新原」百号

上記の月刊「新原」は海軍炭鉱で発行されていたものです。これに関連して次の記事があります。機関雑誌 月刊雑誌「新原」を発行し、各戸に無料配布し、従業員指導の機関たらしむ。大正11年1月創刊、本年5月号を以て100号に達す。(海軍燃料廠探炭部概要「九州鉱山学会誌」3巻3号、1932年(昭和7年)5月)

創刊の大正11年は1922年です。ただ、『福岡県新聞紙名簿』では大正15年創刊としていたのです。以下は、正しくは大正13年でした。本連載の第180回(「広報すえ」2018年11月)、新原海軍炭

りました。福岡日日新聞、九州日報は現在の西日本新聞の前身です。

(新聞名)九州時事新報 (所在地)福岡市博多下鰯町(創立年月)大正九年十月創立 (組織)個人経営 (資本金)五万円 (夕刊頁数)四頁 (社長)古川初雄 (主筆)武井志徽 (平盤台数)三 (活字)七七五 (行字数)十五字詰 (二段行数)八十行 (頁段数)十三段 (二ヶ月の購読料)金月五十銭 (広告料一行単価)一円 (兼営事業)平野屋日報其他。

『日本新聞年鑑』第2巻(1922年(大正11年)版)では、武井志徽は久留米毎日編輯(長(大正10年5月入社)、新聞歴は博多毎日、大牟田新聞、著作は青雲狂風、『自序伝赤衣の使者』となつています。『赤衣の使者』は赤とんぼのこと。ただ、著作を国会図書館デジタルコレクションで検索してもヒットしませんでした。

また1927年(昭和2年版)では武井志徽は引き続き主筆として名が見え、博多日日新聞は東京支局・大阪支局を持ち、社員は50人、部数(自称だそつ)は1万2000部に達しています。『福岡県統計書』1930年(昭和5年)では「新聞紙調」に武井の名が出てきます。

(新聞紙題号)九州寸鉄新聞 (創

鉦の雑誌「新原」(4)でその問題に触れていました。(以下は再掲載です)

前号まで3回かけて紹介した通り、贈与版「色刷の月刊「新原」は大正13年(1924)1月、第1巻第1号が発行され、翌14年2月の第2巻第2号まで14号分の発行が確認できました。

今年5月の連載177回では「大正14年3月以降が発行されているかどうかはわかりません。」と書きましたが、体裁は変わるものの、活版刷りで刊行が継続されていたことが、実は従来から知られていた雑誌「新原」によって確かめられました。今回はそのことにふれてみたいと思います。

活版刷り「新原」は毎月5日、海軍燃料廠探炭部(つまり新原海軍炭鉱です)の発行で非売品。発行兼編輯人尾崎強、印刷人木村亀太郎(福岡市)。私が持っているのはおよそ40年前に複写したもので、現物は所在不明となっています。

複写で残っているのはいずれも昭和4年(1929)の11冊で第6巻。大正13年創刊の「新原」から5年後(6年目)で、巻数は合います。それで体裁が違っていても、同じ「新原」という雑誌だと確認できるわけです。昭和4年1月号には号数の記載がなく、2月号は第6巻第2号にあたり

立年月日)昭和五年一月二十一日(発行時期)月一回 (発行所)福岡市馬出五七 (発行人)武井志徽

次に、「福岡県統計書」1931年(昭和6年)の記事です。武井志徽は須恵村で「福岡糟屋新聞」を発行しています。

(題号)福岡粕屋新聞 (創立年月日)昭和三年十月二十三日 (発行時期)月一回 (発行所)粕屋郡須恵村[大字名……欠]四二二 (発行人)武井志徽

『福岡県統計書』1935年(昭和10年)では、

(題号)福岡糟屋新聞 (発行日)月三回 (創刊年月日)昭和三年十月二十三日 (発行所)福岡市古塚三角七二三 (発行人)武井志徽 (編輯人)同上

『福岡県統計書』1939年(昭和14年)では、発行所が糟屋郡香椎村香椎二ノ一四四に変更されています。

なお、「第三種郵便総覧」(通信省郵務局編、1934年(昭和9年)によると、

(題号)福岡糟屋新聞 (記載事項)政治、経済、学術、時事 (認可年月日/発行定日)昭和4、6、4/毎月1回1日 (発行人)福岡市馬出三角 武井志徽 (発行所)福岡県須恵村/福岡糟屋新聞社 (見本差出局)博多

『福岡県新聞紙名簿』(福岡県編、窓統社、1933年(昭和8年))

ますが、通巻第62号と表紙に記載されています。このことから、大正13年1月と昭和3年12月の5年間に60号分が刊行されていることになり、毎月1回も欠かさず刊行されていたことが明らかになりました。

つまり「新原」は1924年(大正13年)1月の創刊ですから、大正11年1月創刊は間違いと思われるですが、前身となる何らかの出版物があった可能性もあり、なお注意していきたいと思います。『九州鉱山学会誌』の記事から1932年5月に通巻100号に達したことが分かりました。計算してみると、1932年4月発行分が100号になるので、どこかで1号分休んだ可能性がありますが、それでも定期発行が維持されていたことが分かります。終刊の時期は不明です。また、炭鉱内の全戸配布が行われていたことも、『九州鉱山学会誌』から分かったことでした。